

<前回：近代文学3・ドイツ文学>

(1) 宗教改革と西欧近代

0. 聖書：原典と翻訳、「聖書のみ」(聖書主義)と聖書の近代語

1. ルター(1483-1546, 1517)のライフワークとしての聖書翻訳

新約聖書：1522年翻訳完成 旧約聖書：34年翻訳完成

2. 律法から福音へ

3. アントワーン・ベルマン『他者という試練——ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房、2008年。

「ひとつの固有の国民文化の形成および発展は、異なるものとの徹底的かつ決然たる関係としての翻訳を媒体としうるし、またそうでなくてはならないことをもルターの聖書は示唆しているからだ。」(65)

・市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム。宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

(2) ドイツ文学とキリスト教——ゲーテ『ファウスト』

0. ルター派：有限は無限を含みうる。文化は宗教と密接な関わりを持ちうる。

1. 錬金術師ドクトル・ファウスト伝承(15あるいは16世紀)

古代の魔術的異教的伝統+キリスト教：科学・呪術・宗教との結合

マクロコスモス(大宇宙)とミクロコスモス(人間)の照応関係

2. 戯曲『ファウスト』(岩波文庫)

・古代異教とキリスト教→ファウスト博士(錬金術家+キリスト教神学者)

・ヨブ記のモチーフ：「舞台の前曲」「天上の序曲」——ヨブ記1～2章(神とサタン)

(ヨブ記の第1・2章の意義：悪・不幸の因果応報的な議論を限界をあらかじめ提示することができる。)

3. 神学者ファウスト

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」(ヨハネ1.1)

ゲーテの「ファウスト博士」は、ロゴスからダーバールへと遡及している(?)

ロゴス → ダーバール

言葉/心/力/行為

4. 永遠の女性(グレートヘン)：上から下へ、そして上へ引きあげる

・「瞬間に向かって」「留まれ、お前はいかにも美しいと。」

・天ら降ってきた天使たちにファウストの魂は救い出される。彼の魂が赦されて天国に入ることができるように、かつての愛人グレートヘンが贖罪の女として現れ、聖母に対して恩寵を願う。永遠の女性は、彼の魂を導いて昇る。

10. 近代文学4：ロシア文学

(1) ロシア文学とロシア正教会

1. ロシア社会の後進性への問題提起と知識人(作家を含めた)の無力感

「無用の者」(ツルゲーネフ)、社会変革(近代化・ヒューマニズム)の意識

苦悩としての近代と希望としての近代、社会主義とニヒリズム

2. スラブという意識(汎スラブ主義 cf.ゲルマン)とロシア正教会の伝統

(2) ドストエフスキー(1821-1881)

1. 神の死、無神論との関わりにおける宗教的生

近代世界における伝統の解体(宗教との関わりで言えば世俗化)が、何をもたらしたのかを、突き詰めて考える。そこから宗教性を問い直す。

4. 人間の苦悩は社会制度の改良では対処できない、より根本的なところから生じる。

キリスト教的に言えば、「原罪」。神を否定することが魂の再生を妨げる。

5. 『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』

6. 『罪と罰』: ラスコーリニコフ、金貸しの老婆、ソーニャ

非凡人(「いっさいを許された」英雄)と凡人(群衆)

「四つ辻へ行って、みんなにお辞儀して、地面に接吻しなさい。だって、あなたは大地に対しても罪を犯しなすったんですもの。そして、大きな声で世間の人みんなに、『わたしは人殺しです!』とおっしゃい」この言葉を思い出すと、彼は全身をわなわなとふるわせ始めた。・・・その刹那、彼の内部にある一切が解きほぐれて、涙がはらはらとほとぼしり出た。彼は立っていたままその場も動かず、地面へどうと打ち倒れた。」(米川正夫訳、新潮文庫(下)、423頁)

6. 殺人と大地 → ロシア正教の宗教性、大地と女性のモチーフ

「4:8 カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。9 主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」10 主は言われた。「何としようことをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。11 今、お前は呪われる者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われる。12 土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」(創世記)

7. 『カラマーゾフの兄弟』: ドミートリイ、イヴァン、アリョーシャ、ゾシマ長老

8. イヴァン・カラマーゾフの超人哲学、無神論

・劇詩『大審問官』

宗教制度としての教会とイエス(再臨のキリストと対立する制度としての教会)

・予定調和的の神義論への抗議

罪のない子供たちに加えられた残虐に対して語られる「永遠の調和」

「それに、調和ってやつがあまりに高く値踏みされてるから、そんな入場料を払うのはまるで僕らの懐ろに合わないよ。だから僕は自分の入場券を急いでお返しする。もし僕が潔白な人間であるならば、出来るだけ早くお返しするのが義務なんだよ。それで僕はそれを実行するのだ。ねえアリョーシャ、僕は神様を承認しないのじゃない、ただ『調和』の入場券を謹んでお返しするだけだ。」(米川正夫訳、岩波文庫第二巻、73頁)

(3) トルストイ(1828-1910)

9. 『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』、『復活』。宗教的な小作品群・民話集、『懺悔』

10. トルストイ主義、キリスト教的アナーキズム。特に、『アンナ・カレーニナ』(1875-77)後に、農民的無政府主義、悪への無抵抗を唱え、国家、教会、私有財産の否定に達する。世界的な影響。「愛と無抵抗主義——ガンジーへの手紙」(1910)
11. 短編作品『光あるうち光の中を歩め』(1893、新潮文庫)
時代：古代キリスト教の時代、主人公：パンフィリウスとユリウス、青年から老年へ
12. ユリウスの人生：人生の中で何度もキリスト者としての生き方に接近しつつも、その都度チャンスを生かすことができずに人生を過ごす。晩年にいたって、キリスト教徒共同体の一員なることができた。
13. ユリウスの後悔：年老いた自分はもうキリスト教徒として何もできないという絶望、自分は人生を無駄にしたという思い。
14. 「俺は何の役にも立たない、今となってはもう何一つできない」のだと。それに対して、傍らの腰の曲がった老人が、「もしあんたが働き盛りの時に、神への奉仕をしていたら、神に必要なことを全部行っていただろうか？」と問いかける。
15. 一人の人間が神に必要なことをすべて行うことなどできない。しかし、できなくて良い。大切なのは、今、自分に許されたことを精一杯なすこと、行って働くこと、であって、そのためにはもう遅いということではない。
「働きなさい、兄弟、労働は喜ばしいものじゃでのう」(114)
「あんたは倍も、十倍も、百倍も、余分にやったにちがいないと言うだろう。しかし、もしあんたがすべてのひとびとより百億倍も多くなしとげたにせよ、神の仕事全体から見れば、それは何でもありはしない。取るに足らぬ大海の一滴じゃ。」(115)
16. トルストイのメッセージ：無駄な人生、遅すぎた人生などない。
キリスト教的ヒューマニズム：
キリストはあなたと共におられる、だから勇気を出して、「光のあるうち光の中を歩め」。自分らしく生きることに遅すぎるということは決してない。これは、トルストイが理解したキリスト教のメッセージの核心と考えて良い。
17. 近代批判：所有・私有の問題。
・「人にはどれほどの土地がいるか」(『トルストイ民話集 イワンのばか 他八篇』岩波文庫)
・「土地への欲望」、農民の場合。
・「パホーム」、「《土地はたくさんとったが》こう彼は考えた。《神さまがその上に住まわせて下さるだろうか？ おお、おれは自分を滅ぼした！ とても走れまい》・・・」(102)
「パホームの下男が駆けつけて、彼を抱き起こそうとしたが、彼の口からはたらたらと血が流れた。彼は死んで倒れたのだった。下男は土掘りを取りあげて、——頭から足までがはいるように——きっちり三アルシンだけ、パホームのために墓穴を掘った、そして彼をそこに埋めた。」(103)

<ルカ福音書> マルタとマリア

「10:38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせ

わしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」⁴¹ 主は答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。⁴² しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

<参考文献>

金子幸彦『ロシア文学案内』岩波文庫別冊2。